

## メッセージアウトライン

### マタイ 28:1~15、I コリント 15:12~22「イエス・キリストの死よりの復活」

最初に造られた人間アダムが神の前に罪を犯して以来、人間の罪はこの世界に死と混乱と悲しみと絶望をもたらしてきた。世の宗教は、人はなぜ死ぬのか、人生の意味は何か、どうしたら救われるのかなどの問いに対して様々な答えと道を示してきた。

→輪廻転生（迷いの世界を生き変わり、死に変わり、延々と続いていく）、人間は死んだら終り。無に帰する。地獄極楽はこの世にある。人生は不可解である。人生は空しい。

どうせ死ぬのだからこの世を享樂的に生きるに限る。神仏に頼り、すぎるのは弱い人間のすることだ等々。

しかし、イエスは言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません」 ヨハネの福音書 14:6

「道」とは人が歩むべき正しい道であり、真の神に到達する方法、手段を意味する。「真理」とは偽りのない事実、本当のこと、不純のない純真、変化も嘘も誤りもないなどの意味。「いのち」とは、しばらく現れてやがて消えていくようなはかないいのちではなく、すべてのいのちの源、人に永遠のいのちを与えることのできるいのちそのもののお方という意味。→ヨハネの福音書 1:4、5:24~25

「父」とは父なる神、全知全能の神、永遠無限不変の神、天地万物を造られた創造主なる神のことを言う。この神のもとへ行くためには、「わたし」を通してでなければ行けないとイエスは言われる。

しかし、イエスは地上でわずかな期間布教した後、十字架にかけられて死んだではないか。そのような者がどうして救い主であると言えようか。多くの人々はこのように考えている。このイエスが受けられた十字架の苦しみについて聖書は教える。→イザヤ書 53章 イエスの受難は神のみこころ、神のご計画であった。イエスの受けられた苦しみは私たち人間の罪の贖いのための苦難であったのだ。

#### マタイの福音書 28章 1~15

イエスはゲッセマネの園で捕らえられ、ユダヤ人たちの不当な裁判によって十字架につけられ、岩をくりぬいて造った墓に葬られた。墓は大きな石でふたをされた。

[1-2]イエスが葬られて三日目の日曜日(週の初めの日)朝早くまだ暗いうちにマグダラのマリアとほかのマリアが用意しておいた香料をイエスのからだに塗るために墓に来た(マルコ 16:1~2, 路 24:1)。そのとき主の使い(天使)が天から降りてきて墓のふたの石をころがして、その上に座ったので大きな地震が起こった。

[3-4]墓の番をしていたローマの番兵たちは御使いを見て恐ろしさのあまり震え上がった。

[5-7]御使いはマリアたちにイエスが前から言っておられたように(マタイ 16:21,17:22-23,20:18-19)死より復活されたということを知らせ、弟子たちにこの復活の事実と、ガリラヤへ行くように言いなさいと告げた。

イエスは弟子たちの故郷ガリラヤで彼らと再会され、彼らを励まし、福音を宣べ伝えることを託されるのである。→マタイ 28:18-20

[8-10]しかし、イエスは彼女たちが弟子たちに知らせに行く途中でも、ご自身を現され、彼女たちの礼拝行為を受け入れられた。ユダヤ人は礼拝は真の神に対してのみすることを知っており、神でないものを神として拝む偶像礼拝は堅く禁じられていた。→出エジプト記 20:3~6 イエスが単なる人間であったならば、このような礼拝行為は拒まれたであろう。しかし、イエスは受け入れられた。それはご自身が単なる人間ではなく神のもとから来られた神の御子であったからである。聖書には父なる神、子なる神(イエス・キリスト)、聖霊なる神が示されており、これを神学用語では三位一体の神(神という本質においては一つであるが、父、子、聖霊という三つの位格を持っておられる)という。

[11-15]墓の番兵たちは彼女たちよりも早くエルサレムに着き、起こったことを全部祭司長たちに話したが、彼らはイエスの復活を信じ、悔い改めるどころか、兵士たちに多額の金をやって丸め込み、弟子たちがやって来て、イエスの死体を盗んで行ったと言わせるように工作した。

このイエスの復活に関連して

I コリント人 15:12~22

もしもキリストが死からよみがえらなかつたならばどうなるのか。

[13-14]①私たちの宣べ伝える福音は実質のない単なる気休めということになる。福音とは神のひとり子イエス・キリストを自分の救い主と信じる者は救われ、滅びに行くことなく永遠のいのちを与えられるということ。→ヨハネの福音書 3:16

[15-17]②私たちの信仰はむなしく、私たちは今もなお罪の中にあることになる。

[18]③当然、キリストを信じるクリスチャンも死に勝てない。

キリストにあつて眠つた者(死んだ者)は滅んでしまったことになる。

[19]④クリスチャンはすべての人の中で一番哀れな者となる。

[20]しかし、キリストは確かに眠つた者の初穂として死者の中からよみがえられたのである。彼を信じて死んでいった信仰者もやがて復活の時に来て、朽ちることのない新しいからだを与えられる。→I コリント 15:42~53

[21-22]死はアダムによって入ってきた。しかし、死よりの復活はキリストによって与えられるのである。

「すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです」ローマ 3:23~24

「罪の報酬は死です。しかし神の賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです」ローマ 6:23

## 「イースターの意味」

イースター（復活祭【復活節とも言う】）は、私たちの罪を贖うために、私たちの身代わりとして、十字架にかけられて死んだイエス・キリストが三日目に死より復活したことを記念・記憶する、キリスト教において最も重要な日。多くの教会で特別な礼拝が行われるほか、様々な習慣・習俗・行事がある。正教会ではギリシャ語から「パスハ」とも呼ぶ。

復活祭を表す英語「イースター(Easter)」およびドイツ語「オースタン(Ostern)」はゲルマン神話の春の女神「エオストレ(Eostre)」の名前、あるいはゲルマン人の用いた春の月名「エオストレモナト(Eostremonat)」に由来しているともいわれる。8世紀の教会史家ベダ・ヴェネラビリスがこれに言及し、ゲルマン人が「エオストレモナト」に春の到来を祝う祭りをおこなっていたことを記録している。ただしこの説も確実ではない。

かつてイスラエル人が寄留していたエジプトを指導者モーセに率いられて脱出したことを記念する過越の祭りがユダヤ暦のアビブの月（別名ニサンの月）の14日の夕刻、すなわち15日の初めに犠牲の動物を食することによって始まり7日間続く。→レビ記 23:5～8

（ユダヤ暦では夕刻から始まって次の日の夕刻までを一日と数える。）

このアビブの月は太陽暦の3月半ばから4月半ばまでの一か月にあたる。

イエス・キリストがユダヤ教当局者たちによって捕らえられ、十字架に至る苦難を受けられた週の木曜日はこのアビブの月の14日であり、その日の夕刻15日（金曜日）より過越の祭りが始まった。イエス・キリストは金曜日に十字架につけられて、墓に葬られ、三日目の日曜日の朝に復活された。キリスト教会はこの日を記念し、イースターとして祝う。

イースターの日はこの過越の祭りの始まる15日と関連し、春分の直後の満月が欠けてきた時の最初の日曜日と定められた。それゆえ、イースターの月日はその年によって異なる。春分の日は3月21日頃なので、それ以前にはイースターはない。